sodachi　アプリ

重心型　児童発達支援

育ちの舎 アプリ

事業所名は、小説『星の王子さま』の王子とキツネが出会う場面に登場する「アプリヴォアゼ（apprivoiser）」というフランス語に由来します。

作中では「心を通わせる」という意味合いで使われている、アプリヴォアゼ。心通わせ、お互いがかけがえのない存在になるために必要なこととして、キツネが王子に語りかけます…

「僕の生活は単調なんだ…。でも、もし君が僕と心を通わせてくれれたなら、僕の生活はずいぶんと楽しいものになる。僕は足音を聞き分けることができるから、誰かの足音が聞こえたら僕は巣穴に隠れるよ。でも、君の足音を聞けば、それはまるで合図の音楽のように聞こえて、僕は巣穴から飛び出してくるのさ。それに、見てごらんよ。あそこに麦畑が見えるだろう？僕はパンを食べないから、麦畑を見たって何とも思わない。でもね、金色の髪をした君が僕と心を通わせてくれたなら、あの麦畑も素晴らしい景色になるんだよ。麦は金色だからね。麦を見るたびに僕は君のことを思い出す。そして、僕は、麦畑を吹き抜ける風の音さえも好きになるんだ」

「まず、君は僕から少し離れたところに座るんだ。そう、そんなふうに。そして、僕は君を横目で見つめる。でも、まだ口を聞いちゃダメだよ。焦っちゃいけない。君は、毎日少しずつ近くに座るんだ」

「毎日毎日、少しずつ…繰り返して積み重ねていくのさ。例えば、君がもし毎日同じ時間に来てくれれば、僕はその１時間前から嬉しくなってくるんだ。時間が近づけば近づくほど嬉しさが募ってくる。そうやって、僕は幸福の時間を知ることができるようになるんだ」

これは、重心医ケア児との関わりにおいて、もっとも重要なことの一つとして理解しておくべき療育のあり方と同じだと考えています。事業所を利用するお子さん一人ひとりと心を通わせ、かけがえのない存在となるようサービスを提供いたします。

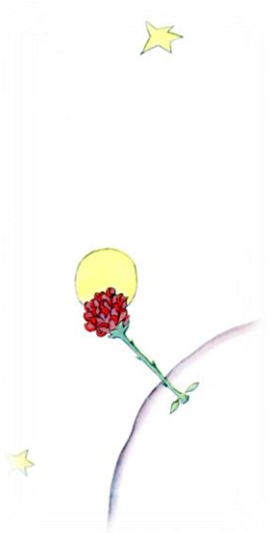
また、スマートフォン等で馴染みのある「アプリ（application）」。私たちの事業所も地域に数多あるアプリの一つです。一人でも多くの方々に必要とされ、生活にインストールしていただけるようなアプリになりたい。アプリにはそんな想いも込められています。

sodachi グリーム

重心型　放課後等デイサービス

育ちの舎 グリーム

事業所名は、アプリと同じく『星の王子さま』に登場する王子とキツネの対話場面に由来します。
「本当に大切なものは、目に見えない」という作品上の重要なキーフレーズが登場する場面で、キツネが語ります…

「僕はいつでもこの砂漠を愛している。砂丘に座っていても何も見えないし、何も聞こえない。でもね、それでも沈黙の中で何かが鼓動し、輝いているんだ」（I have always loved the desert. One sits down on a desert sand dune, sees nothing, hears nothing. Yet through the silence something throbs, and gleams.）

「グリーム（gleam）」とは、光り輝くという意味です。
重心医ケア児は、何の変化もなく過ごしているように見えるかもしれません。実際に、変化していないと言っても過言ではないほどの速度でしか変化（成長・発達）しない子もいます。しかし、子どもたちの中には確かな鼓動（可能性）があり、いつでも光り輝いているのです。
障害や医療的ケアの有無に関わらず、子どもたちは自ら輝く素材そのものですから、事業所を利用するお子さん一人ひとりがより輝けるよう、可能性に働きかけ続けるサービスを提供いたします。この子らを世の光に。